監督三〇年の感想

高々運動部長
岡田由重

高崎高校運動部の総合OB会である翠巒体育会が結成されて、一年余りの歳月を経て組織も整備され、機関誌「翠巒体育」の第二号が発刊されることは誠に御同慶の至りである。これから総合会員名簿が発行されれば、本格的な歩みになることと思う。

また、高崎高校においては、創立八〇周年を間近にして校庭の改修整備という大記念事業を計画しており、翠巒体育会の会員各位の御指導・御助力を多く仰がなければならないと考えている。

さて、僕が高崎高校と縁を持ったのは戦後の多分昭和二十二年初秋の、街には電燈もつかず真暗なある夜のことであった。高崎理研に在職中、共にラグビーを楽しんだ友人に連れられ、一本のローソクの火のともる薄暗い高草木眼科医院の応接間で初めて高草木喬先生（一四回）を紹介されて先生を知った。その時高崎中学のラグビーの指導を頼まれ内藤由已男校長（一六代）・故富田俊一部長（一一回）に紹介されて早三〇年、星霜は目まぐるしく移り変った。

この三〇年間を思い返せば無量の感すらし、短く感じた三〇年はやはり永かったなと思い出される。試合に勝って泣き負けて泣いた選手の顔々。また合宿練習で頬を流れる涙もふかず励んだ顔が、感無量に懐かしく思い出される。

監督生活三〇年の間、僕の指導者として感じ取ったことは、おおむね次の三つであった。

一、監督は「あだ名」で呼ばれろ

二、選手は自分自身のために試合し勝て

三、一戦一戦を大事に戦え

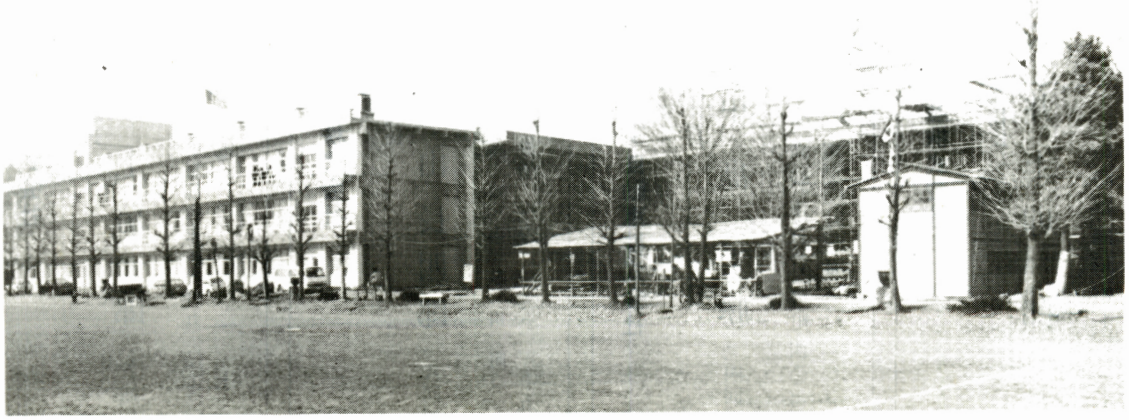
第一は、監督は「あだ名」で呼ばれる時は選手と共にある。「先生」と呼ばれるようになると、選手とは間が遠くなっていて強い選手が造れない。

第二は、僕の感じでひがみといられるかも知れないが、国体で優勝して帰って来た時、高崎駅頭で市民の大歓迎を受けたが、学校では選手に何ら報いてくれなかった。せめて全校生徒の前で、「御苦労だった」、「よくやった」くらいのねぎらいをして欲しかった。全く空しく感じた。それ以来、誰の名誉のためでもなく、自分自身のために勝てと指導して来た。

第三は、第四回東京国体関東ブロックの第一戦で新潟高校と対戦した。この試合は必ず勝てると次の対水戸農業高校戦に焦点を当て、少し負傷した主力選手二名を大事を取り残留させて遠征した。これが誤算で、11—9で敗れた。この時、身をもって、一戦一戦を大事にしなければと感じた。またこれが、スポーツマンの最も心得ておかなければならないことで、これこそ相手に対する礼儀である。

監督生活三〇年の思い出は尽きないがその間感じた一端を感じたままに述べて終りにしたい。

翠巒体育会々員の諸君は、皆それぞれ色々経験し感じて来たこともあるだろうが、現役の選手を指導するに当っては、時代も刻々変って来ているので、選手の意をよく察知して適切な指導をし強化して欲しいと思う。



竣工近し　母校の改築第二期工事（S五一・三）

体育の重大さ

高々同窓会副会長
原　一雄

人間は、その一生涯、「いかに生きるか」ということを命題として、幸福を目指して生きて行くものだといいます。教育の根本も、その幸福の根源となる個の完成を目指すということにあると思います。個の完成とは、「智・徳・体」の立派に兼ね備わった姿であります。

今の世の中は、戦後の経済発展を目指すあまり、物質と知識の表面的発達と氾濫に偏重した力を傾けて来過ぎたのではありますまいか。知識はもとより大切でありますが、その知識を活用する根源の人間の心の高さは、何によって養われるのでありましょうか。また、健全な体力というものが一生の幸福を望む根本の基礎となることは、社会・人生の闘いに立った者には痛い程分ることであります。

私は、体育ということは苦手であり、物をいう資格がありません。若い時に、健康のこと、体力を作ることを考えずに本ばかり読んでいる時がありました。そのために、長い療養生活をしたことがあります。しかしそれだから、健康ということ、体力というものの重大さをいやという程に味いました。

人生は、死ぬまで、どんな意味においても、闘いであります。それは、日常の環境の中の闘いもありますが、理想というものを目指す限りは、自分の心との闘いであります。その永い永い闘いにも、基礎となるのは自らの体力であります。

私は、スポーツ・体育のことはよく分りませんが、若い時からの友人でスポーツによって鍛えられた人たちが、老年になっても実にさわやかな心と行動力を持っていることをうらやましく感じております。これは、スポーツが目指す「心・技・体」の充実とこの錬磨の中で知らず知らずに鍛えられる忍耐・粘り・勇気・決断・無心等、人生のあらゆる苦難の場合にも同じように必要な要素が、その人の体にしっかりと根付いているからではないでしょうか。めそめそじめじめせず正々堂々と立ち向かうよりほかに道のないスポーツの世界から、明るい豊かな心が養われて行くのではありますまいか。

今から二〇年近い前であったと思いますがまだ田中悦平先生が高々の校長（一七代）でありました時に、井上房一郎さん（一五回）のお力によって、小泉信三先生が高々へ講演に来られたことがあります。私もその席に連なりましたが、小泉先生はその時、人生における「練習」の大切さについて話をされました。スポーツにおいて練習・錬磨の大切なことはいうまでもありませんが、練習・錬磨の意義は、体育のみならず知識を得るためにも人間の心をより高めるためにも、実は必須の大切事なのであります。どのような芸の道におきましても、またそのことが根本の重大事であることは、少しくその道に苦しんだ者なら誰にもすぐ分ることであります。

そうしてまた繰り返して申し上げますが、スポーツ・体育のつきつめた目標は「心・技・体」の一致した進歩・完成でもありましょう。このことはまた、あらゆる芸道の「心と腕」の問題ともかないます。そうして、たくましく旺盛な体力とそこに宿る高貴な心の完成です。

乾き切った海綿が水を吸い込むように、どんな知識も徳も身に付けるその基礎造りの人間の形成の一生で最も大切な時期を、若い高校生諸君は迎えております。体育を通じてその獲得が一層速やかになるのです。こういうことに心を配る運動部の先輩の人たちが翠巒体育会を作り、相携えて体育の向上に力を傾けようとするのは何とも有難いことであります。

どうか体育の根本精神に通う持久力・粘り・闘志・根性をもって、この大切な体育向上の大切な交流の場である翠巒体育会をますます発展させて、今後も大きく幅広い活躍をされるよう祈ってやみません。

（二九回・群馬米穀KK社長）

井上工業株式会社
取締役社長
井上房一郎（一五回）
東京都台東区上野五―二四―一六
電話　〇三（八三二）一二七一

美峰酒類株式会社
取締役社長
小山長四郎（一八回）
高崎市歌川町一
電話　〇二七二（二二一）二一五五

関東いすゞ自動車株式会社
取締役社長
中島　勝（二四回）
高崎市倉賀野町四〇三
電話　〇二七二（四六）一一一一

井上物産株式会社
取締役社長
井上卯一郎（三三回）
高崎市問屋町二―一一
電話　〇二七二（六二）一一四一

特別寄稿

すぽーつと共に60年

市川　清

今、私は琴平神社の神主をしているが祭日には大勢の参詣人が来る。その中の何人かに、「先生、高々の野球はどうですか」という質問を必ず受ける。私の顔には、高々野球という烙印でも押されているのではないかと疑う位である。

昭和十七年から約二〇年間近くも野球部の世話をしたし、戦時中も戦闘帽をかぶらないで野球帽をかぶって登校していたので、当時の校長は何回も私に注意をしたし、片岡小学校の児童は高中の野球の先生と呼んだ。高々を去って一三年になるが、高々野球部というと若い血がたぎるのである。

私は、小学校の五年・六年の時は三塁手と投手をやって、曲りなりにも少年野球の選手をした。しかし私の本職は、陸上競技と器械体操であった。小学校・中学校時代、短距離で敗れたことは極めて少なかった。高中四年（今の高校一年）の時、一〇〇mで優勝したことがある。その時のテープを切るフィニッシュのランニング姿は、新町の金子写真館に長い間飾られた。今でも中学時代の黒と白のスパイクは、大切に保存している。五年の時は、群馬師範学校に強敵がいたので優勝は出来なかったが、選ばれて全国中等学校陸上競技大会に出場した。第二次予選で敗れたけれども、同級の今は亡き矢島健は三段跳で全国優勝をしている。県立蚕糸高校長・元高々教諭の矢島明氏（二三回）は彼の実弟である。

こんなことをいうとほらのように聞えるが、実は親父がランニングでは引けを取らなかった人であった。だから、私は先天的に恵まれていたのであろう。器械体操は、中央小学校時代、組担任の田島武夫先生（一六回）に教わった。先生は鉄棒の名手であり、全国大会に出場している。歌人・俳人として有名であるが、実は器械体操のベテランであった。このことは、昭和四十八年一月、先生の叙勲祝賀会（勲五等双光旭日章）で、短歌・俳句・芸術各代表の祝辞の後、私は弟子代表として先生のスポーツマンであることを述べた。出席者四〇〇名の大部分の方は、驚いた様子であった。私は、芸術家でありスポーツマンである先生を、こよなく敬愛しているものである。

ともあれ、私は六〇年の長い間、スポーツと共に生きて来た。私からスポーツを奪うことは出来ない。

昭和四十六年七月翠巒会館が高々の一隅に建設されてから後、四十九年五月に運動部各部のOB会の連合体である「翠巒体育会」が出来たことは、高々在校生にとって良い刺激となり幸福なことだと思う。そして、高々OBは堅いきずなに結ばれるであろう。しかも、この運動部OBの諸君に母胎となっていただき、核心となっていただいて、母校同窓会が飛躍的伸展を遂げてもらいたいことを期待するものである。

（二五回・琴平神社宮司
元高々野球部長・元県立中央高校長）

みどり寿司
須藤　清（三四回）
高崎市下豊岡町九八
電話 〇二七三（二二）八七四六

トヨタカローラ高崎株式会社
取締役社長
小山禧一（四二回）
高崎市昭和町四一
電話 〇二七三（二二）六二二二

梅玉堂菓子司
須永　孝（四七回）
高崎市八島町六八
電話 〇二七三（二二）三四九〇

カタノ運動具店
片野　恒（四九回）
高崎市中紺屋町二三
電話 〇二七三（二二）二五五二

バスケットとの出会い

岩田武雄

小学校五年の時高崎市の水泳大会に出場してから野球・陸上・卓球・バレー・バスケットと手懸けて、もう三〇年間も私は勝負を競っていた事になります。現在では、スポーツが生活の中に入り込んで切り離す事が出来ない状態です。思えば、この三〇年間というもの毎年選手として最近は監督として強敵と戦い続け、勝っては勝利の快感を覚え得意の絶頂になり、敗れては悩み悲しみ敗因を反省しまた新しいものにチャレンジする闘志をかき立てる連続だったといっていいと思います。

私は今でこそ先輩の前で勝手な事をいっておりますが、伝統ある高々バスケットボール部に入部した動機は、実をいえば、近所の古関さんに入部しないと「ブットバスゾ」といわれこわくて入部したのです。何も出来ない私が高女の体育館で——当時校舎が焼失して体育館がないため——ランニングシュートを下から入れ高女の選手に笑われた悔しさや、人並にシュートが入る様になった時のうれしさが昨日の様に思い出されます。高々時代、同級生は皆勉強家で私と全く対照的でした。私は勉強せず、バスケットばかり夢中でしていました。「試験の時ぐらい練習を休んで勉強しろ」と、清水貞保先生（三〇回）には何度となく注意を受けたものです。こんなに一生懸命やったつもりでも、先輩たちにはよく「カツ」を入れられたものです。先輩は現役にとって絶対的な存在でしたから、どんなつらい厳しい練習でも歯を食いしばって頑張ったものです。殊に合宿の時はOBたちが集まっての実技指導ですから想像を絶する練習で、階段の上り下りはつらく、特に便所へは泣きべそをかきながら行ったものです。また、合宿の食事が今と比べるとお話にならないくらい悪く、隔世の感があります。橋爪・須永先輩の大口の差入れが有難かった事や、長野・佐橋先輩からの肉一貫目は特に印象深く空腹の我々を大変喜ばせてくれた事が懐かしく思い出されます。この様な損得を抜きにした諸先輩の暖かい心遣いが、私のその後の人生に大きな影響を与え人間形成に資する所多大であったと思います。

現役時代の最終目標のインターハイには山形県酒田市の大会に出場しました。チームは井上大先輩・反町先輩の指導のもと、当時はローリングオフェンスと8の字戦法が主でしたが、池上・吉井さんのジャンプショット、岸さんのミドルショット、伊藤さんのステップの大きなカットインショットなど、それぞれ特技を発揮して勝ち進み、準々決勝では福岡県代表の西南学院と対戦しました。前半好調で一七点リードしたものの最後には逆転されベスト4進出が出来ず、控室で涙した事が今でもありありと思い出されます。準々決勝で敗れたとはいえ、私にはこのゲームが大きな自信を与えてくれました。先輩の厳しい指導があったからこそ勝ち進めたのだという事と、自分たちもやれば出来るという自信です。先程申し上げた様に沢山の優れたOBたちの好意に感謝をし、先輩を尊ぶ気持が実感として身に付いた訳です。

その後母校のコーチとして後輩を指導する立場になった時、この体験を柱に、私は強い信念と自信と情熱をもって現役の指導に当りました。鎖の強度はその鎖を作る一つ一つの輪の中で一番弱い輪が基準になると思いますので、チームワークはもちろんの事、特にその元になる個人個人の強さを求めました。ゲームにおいては一つの凡ミスが勝ゲームを失ってしまう事がありますので、日常の練習においては一つのパス・一つのドリブルもおろそかにすれば檄を飛ばし何回でも繰り返し出来るまで反復させました。そのため選手は、強度の疲労と緊張感の連続だったと思います。生身の人間には弱さがあります。ミスを見逃すその弱さを安易に許す甘さが出れば強力なチームは出来ないと、心を鬼にして選手に厳しく当りました。それが後の「血も涙もない鬼の岩田」になる訳ですが、個人的に「いい人」とか「話の分る人」になれば結局は弱い鎖の輪を作り弱いチームになってしまうので、基礎技術（ファンダメンタル）は徹底的に鍛えに鍛え抜きました。今思えば、優しい顔、怒った顔、引きつった顔等、色々な顔を思い浮べますが、コーチして印象に残っているのを書きますと、ロードワークの時砂利道で倒れ血を出し涙しながら完走した岩井君、過度の指立てで指が変形して将来算盤が出来ないとぼやいた石井君、強度の疲労で動けなくなり堤防からおぶさって来た藤原君、倒れてグウグウいびきをかいていた松沢君、酸っぱい梅干をぱくついて味がないもっと飯を食わせろと清水先生に食って掛かった阿部君、練習中激しいけいれんを起す友松君、いやな顔をしながらも練習は絶対休まず頑張った高橋君、便所へ入ったきり練習に出て来ない三友君などなど、次から次へと浮んで来ますが、いずれにしても「成せば成る」事を信じて高い目標に向かっての努力だから厳しい練習だったと思います。この時のこの苦しみに耐え抜いて最後まで頑張り切れた現役は、スポーツを通して自分の体を使って可能性に挑戦する事が自己の精神の鍛錬である事を実感し、その精神力はその後の人生に大いに役立っていると思います。

（五三回・バスケット部）

六九会（S.50. 6. 9）
—バスケット部—

OB会の活動 その一

高高・前高野球部OB 定期戦開幕

野球部　川手　義昭

野球部OB会は、昨秋十月に組織を変更し戦後卒の若手執行部によるOB会として新発足し、戦前戦中卒の諸先輩方には顧問として若手を指導していただく事になり、永年御苦労いただいた中原一男氏（二六回）より中川保氏（五二回）へ会長がバトンタッチされた。

爾来、OBの親睦結束と現役強化を目指して年間事業計画がスタートしているが、その第一弾として前橋高校野球部OBとの定期戦が企画され、県野球界関係者注目のもとに、昨十月二十六日快晴の高々グラウンドで第一回定期戦が開催された。県内はもとより京浜地区からも多数出場者があり、面々揃いのユニホーム姿で古手若手が諸処に交歓風景をなし、キャッチボール・トスバッティングと戦う前より参集遅い前高勢を呑む感があった。京浜後援会々長入沢武右門先輩（三一回）を始め多数の古参OBや中野敏宗校長・市川清先生も来駕、開会式後、午前一〇時三〇分歴史的一戦の火蓋が切って落された。終了後場所を移しての慰労懇談会には、前高有志多数交わり、親交を深めて打ち上げた。なおこの一戦は、企画の段階から結果までマスコミ関係に大きく報道され新聞・テレビをにぎわしめて以来、県内各OB会へ新鮮な刺激を与えている。第二回定期戦は、今秋県営敷島球場にて挙行し、群馬TVで実況中継放映の企画予定である。

組織変更以来、事業活動が活発になるにつれ他校OB組織との接触も始まり、現役対外試合解禁の三月二十五日を待たずして、高崎商業高校野球部OBとの対抗戦が決定し三月二十一日に城南球場で挙行する事になった。高校球界幕開きの対抗戦として毎春行う予定で、市内古豪強豪の対抗意識互いに盛んであり興味ある熱戦が期待されている。（六二回）

新調のユニーホムで
（S50・10・26）—野球部—

◇第一試合

	前高	高高
回		
1	0	0
2	1	0
3	0	0
4	1	2
5	1	1
6	0	2
7	0	0
8	0	0
9	4	6

〔高高〕

打順	守備位置		回
(1)	6	島田	(60)
	PH6	本多	(57)
(2)	4	川手	(66)
	1	細弟	(62)
(3)	1	島谷	(62)
(4)	3	金弟	(66)
(5)	5	太井	(69)
(6)	4	中田	(62)
(7)	7	金里	(59)
	2	富田	(70)
(8)	PH8	坂岡	(62)
	PH8	木東	(65)
(9)	9	小村	(69)
	9	鈴山	(62)

監督指揮：中川　保

〔前高〕

打順	守備位置		
(1)	3	藤生	
(2)	7	武藤	
(3)	2	小平	
(4)	6	東野	
(5)	8	藤岡	
(6)	1	上岡	
(7)	2	金子	
(8)	5	福島	
(9)	9	古賀	
	4		

◇第二試合（三五才以上）

	前高	高高
1	0	0
2	0	3
3	2	5
4	0	0
5	1	0
6	2	0
7	0	0
8	0	0
9	1	0
	6	8

〔高高〕

打順	守備位置		回
(1)	9	竹内兄	(52)
	9	川鍋	(52)
(2)	8	染谷	(51)
	8	長浜	(55)
(3)	1	須郷	(57)
	7	島方兄	(59)
(4)	7	本多	(57)
(5)	6	佐藤	(51)
(6)	5	境原	(52)
(7)	4	竹内弟	(57)
(8)	3	田島	(57)
(9)	2	細谷兄	(57)
	1	大山	(44)
	PH	若山	(58)
	1	中川	(52)
	8		

監督指揮：大山吉造

〔前高〕

打順	守備位置		
(1)	1	関口	
(2)	9	川端	
(3)	2	森村	
(4)	5	東野	
(5)	6	小平	
	8	田中	
(6)	6	鈴木	
	1	渡辺	
(7)	9	佐藤	
(8)	7	上岡	
	3	江沢	
	PH3	金子	
	4	篠田	
(9)	4		
	5		

キープ化成株式会社
代表取締役
住谷克彦（四九回）
安中市中宿一—五—七
電話 〇二七三(八二)二八二三

株式会社 長野
専務取締役
長野幸国（四九回）
高崎市問屋町一—七—二
電話 〇二七二(六二)二五七七

有限会社 深井印店
深井正司（四九回）
高崎市住吉町四
電話 〇二七三(二二)四四八一

新日本自動車販売株式会社
代表取締役社長
中林靖（五〇回）
高崎市下小鳥町一二九九
電話 〇二七三(六二)五三〇三

OB会の活動　その二

OB会設立総会開かる

陸上部

大田部　保

翠巒体育会の発足を機に、我が陸上競技部もOB会設立の声が高まり、かねてより大須賀正臣氏（五七回）を中心に名簿作りを進めてまいりましたが、昨年末地元在住者たちで準備会を開き会則やその他の試案を作成、全国OB諸兄に呼び掛け、去る二月十四日に設立総会を開催致しました。総勢一三〇名の三分の一以上の出席を得、会則・役員・会費等を承認、その後の懇親会ではそれぞれの時代における部活動の思い出話などにも花が咲き夜遅くまで歓談、予期した以上の盛会でした。縦のつながりの乏しいOB会として、親睦の目的は充分達せられ、大成功だったと思います。また、やむなく欠席の方たちからも本会の結成にはほとんど賛同の返信をいただき、素晴らしいOB会が出来るものと意を強くしています。

親睦もさる事ながら、母校の現役選手たちへの支援もOB会の大きな目的であり、年会費などの徴収により合宿や遠征費などの援助もこれからは存分に出来る事でしょう。近来、小林馨監督の好指導のもとで、母校の後輩たちの活躍振りは目覚しいものがあり全国総体への出場も多きを数えておりますが、更に一層の向上を願い、メインスポーツとしての陸上競技部が高々運動部の中心的存在たり得る様、物心両面において精一杯の後援をして行くつもりです。

OB会の年間行事も何か考えておりますが、団体競技と異なり、個人競技はなかなか適当なものがありません。総会の翌十五日、青梅マラソンが七、五〇〇人という多数を集めて行われ、我がOB会から参加した者もありました。出場者の最年長は八〇才だそうで、最近健康法として走る事が盛んになりましたが、現役も交え母校の全校マラソンのコースを走る事なども一プランと思っていますが、いかがでしょうか。

（五二回）

私と山岳部

山岳部

深井　正司

戦後、私が山岳部の再建を志したのは昭和二十四年の夏、二年生の時だった。昭和二十四年といえば今から二七年前になるが、当時山岳部の存在は皆無であった。一年先輩のWさんに再建の話をした時かっての用具があるとのことで早速物置を探したが、とても使用に耐えられぬ物ばかりであきらめざるを得なかった。希望者を募ったところ、一年生と附設中学の後輩数名の応募者が集まった。そして用具装備ほとんど自前の部再建の作業が始まった。山行きの列車の切符の入手も容易でなかった。往きの切符も夜遅く列の中に入って求め、帰り切符の当は全くなかった。米を初め食料の調達もままならぬ中で、それぞれが工夫しとにかく山へ行った。

部活動として、初めて北アルプスの縦走、続いて奥日光・尾瀬・八ヶ岳・南アルプス・谷川岳等、卒業までの間悪条件の中で深山に入り、幽谷の水辺を枕に夜のしじまに眼りを求めせせらぎの音に目醒を覚えた。部誌も二回程出すことが出来た。当時の世相の混迷と物不足の不自由さが私たちの心を逆に自然への憧憬と思慕の情熱にあおり立て、深山幽谷を求めさせたと思う。

爾来、幾多の志を同じうする後輩諸君が私たちの苦心の足跡を踏み越えて、雪を求め山谷を求めて活躍を続けている。三年程前の一月の寒い夜、高崎駅で、北陸へ雪中訓練に出掛けるという母校山岳部のグループに会った。部員のたくましさと装備の素晴らしさに思わず目を見張った。隔世の感を禁じ得なかった。

最近はまたOBの後援も心強い。翠巒体育会の結成によって更にその感を深くする。会報第二号への投稿に当って、山岳部の益々の活躍と発達を祈念する。

（四九回）

柔道部と相撲

柔道部

石井　清一

第二次大戦後、進駐軍によって出されていた学校柔道禁止令が昭和二十五年に解除され、直ちに復活した高々柔道部のその後の活躍は、戦前に勝るとも劣らぬものがあったと思う。インターハイにこそ二十七・三十年の二回しか出場してないが、関東大会には多くの出場を数え、県内でもベスト4を下る事は滅多になかった。個人においても国体・インターハイ等の出場者は十指に余り、卒業後も県内外にあって柔道界の指導者として活躍しているOBも少なくない。

柔道部員が相撲も兼ねてやるようになったのは、今から丁度二〇年前である。巷間、柔道と相撲とどちらが強いかなどと面白半分に問う向きもあるが、これは囲碁と将棋とどっちが強いかという事と同じで、比較する事自体ナンセンスである。しかし、相撲の稽古をする事によって足腰が鍛錬され柔道の投技に対する受けが強くなるという事は非常に顕著な事であり、トレーニングをも兼ねてやっているのである。その相撲が、県下のレベルの低さもあるのだが、関東大会にほとんど毎年出場し、インターハイ・選抜十和田大会・高知大会等の全国大会に数回出場して本職以上に好成績を挙げ、ついには関東大会の個人戦において優勝を遂げるという快挙になったのである。

そこで、昭和三十一年に初めて相撲大

会に出場した時の部員の一人として、当時のいきさつや様子を述べてみたい。

当時の柔道部は、前年に続いてのインターハイ出場をねらい、事実、生方主将以下桜井・佐藤・岸・鳥居等を擁し、春の関東大会予選でも軽く優勝して全く県下に敵なしの感があった。しかし肝心のインターハイ予選では、決勝でそれまで一度も負けた事のなかった渋川高校に1－2で惜敗してしまい、一同悔し涙にくれたのであった。それから一週間後の夏休前日、監督の今井孝造先生（現富岡高校）から、「今日の午後、相撲のインターハイ予選があるから出場するように」と突然いわれた。相撲大会に出るなどという事は夢にも思わなかった我々は、びっくりしながらも「先生がいうのだから行きゃあ何とかなるんだんべ」という事で、〝盲蛇におじず〟とは全くこの事だが、まわしもなければもちろん締め方も知らずゆうゆうとA・B二チーム七名で会場の勢農へ乗り込んだ。当時県下に相撲部のある高校は勢多農林・利根農林・新島学園だけで、四股を踏み鉄砲をして我々を待ち構えていた。着くや否や我々は、勢農OBで県相撲連盟の役員をしている人に物置小屋のような所に連れ込まれ、有無をいわせず素裸にされて勢農の古いまわしを締めさせられ、土俵上の作法や仕切の仕方を教えてもらい、文字通り〝他人のふんどしで相撲を取る〟事になったのである。

試合は、前記三校と高々A・Bの五チームリーグ戦であった。生れて始めてまわし一本で相撲を取るという事は、その発祥を同じくするといわれる柔道をしている我々ですら、始まる直前までは勝手も相手の実力の程も分らず何とも不安であった。しかし、いざとなると不思議とくそ度胸がすわり落ち着けるもので、始まるとあれよあれよという間に全勝で優勝してしまった。改めて高々柔道の底力を県下に示した訳だ。Bチームは、残念ながら最下位であった。選手は三年の塩原・本木・二年の岸、かくいう小生は補欠兼マネージャーだった。本木さんは柔道部員ではなかった。塩原・本木さんは個人戦でも一・二位を占め、高々は完全優勝であった。これには並み居る役員諸氏も仰天し、今井先生までがびっくりしていた。勢農に至っては、まわしを貸し親切に締め方から土俵の作法まで教えたら、三〇年連続保持していた県下No.1の座を明け渡しインターハイ出場の夢を打ち砕かれたのだから、何とも面白くなく寝覚が悪かった事だろう。

さて、〝ひょうたんから駒〟で大阪でのインターハイ出場とは相成ったのだが、さすがに全国の壁は厚く、予選リーグであえなく敗退してしまった。しかし個人戦では塩原さんが大活躍、四回戦まで進みもう一歩で全国高校東西対抗の選手に選ばれるところまで行った。補欠の小生も個人戦には出場したのだが、県大会では一試合もせず初の公式戦がいきなり全国大会で、しかも場所はあの栃錦・若乃花が火花を散らし雌雄を決した府立体育館の檜舞台であるとは……。一回戦は不戦勝。二回戦の相手は、何と事もあろうに前年度高校横綱の高知工業高校の早川であった！立合い一発で突き出され勝負はあっけなかったが、早川はこの大会でも優勝。お陰で小生は、「優勝した早川は、二回戦で高崎の石井を突倒しに破り……」と、ただ一人ラジオで全国にその名前を放送されたのであった。取組が分った試合の前夜、今井先生が何とも複雑な顔でいった。「怪我をしないようにやれ、それだけでいいや。」それもそうだろう。早川は、一七五cm・一二〇kgは優にあった。当方はといえば、プログラムには一七〇cm・六五kgとあるが、その実五cm・五kgはさばを読んでいた。仕切を反対側で見ていた今井先生によると、相手の体に隠れて小生が見えなかったそうだ。ただ素人の悲しさ、腰高の仕切のため尻だけが見えたそうだ。何とも情ない話ではあった。宿に帰った時、女中が、「よく頑張ったと新聞社の人がいっていた」といった。一、二秒で突き飛ばされて頑張ったもないもんだ、馬鹿にしやがってと思ったものだが、多分他の人の事だったのだろう。この事と先生のいわれた一言は、今もって忘れられなく奇妙に印象に残っている。

なぜ今井先生が、当時相撲の練習など全然していない我々を急に試合に出場させたのかは、二昔も前の事とて今になっては知るよしもないが、勝てる実力がありながらここ一番という所でもろくも敗れてしまった我々柔道部員に対して、立合いにその勝負の大部分が左右され一瞬の油断も許されない相撲の厳しさを体験させ、今後の柔道に生かさせようという親心ではなかったかと思う。今度機会があったらお聞してみたい。（五七回）

高校三年間を振り返って

庭球部

五十年度卒　石田　和久

高々の門をくぐり、軟式庭球部に入部してから、早くも三年という月日が経ってしまいました。そして昨年は、入部以来念願だった国体選手にも選ばれ、非常に幸せでした。国体は、悔しくも一回戦で負けてしまいましたので特に報告することもありませんが、印象に残ったこととして天皇陛下の前で試合が出来たことは生涯で最初で最後の出来事でしょう。

僕は本当に、高々の庭球部で三年間過せたことをうれしく思います。もちろん悩み苦しんだこともありましたが、同じ目標を持った仲間たちと一諸に、その目標に向かって少しでも前進出来たことは僕にとってプラスになったと思います。考え方も気持も、毎日毎日変って行きました。一年の時は自分が上手になることだけを考え、二年の時は周りのことも気にし始め、三年の時は皆まとまってインターハイ・国体出場を目指して練習に励みました。しかし結局、本当に部員の心が一つになったのは、恐らく僕が三年の初めの時だったと思います。こんな不安定な高校三年間でしたが、悔いはありません。

最後に、今までお世話になりました諸先生・諸先輩方、本当に有難うございました。

サッカーと私と思い出

吉田　紀久雄

ガシャン！「おい、どうする……」。旧体育館での出来事であった。入試前の学校見学の時、持っていったサッカーボールが勝手にガラスに飛んでいったのである。それが、高々における私のサッカーの始まりであった。また入試の最中は昼休みに、親の気も知らずに、ボールを校庭で追い掛けていたりした。今思っても馬鹿な事をしていたナァー。

入学式を済ませいの一番に練習に飛び込んで三年間、途中一度やめようと思った事もあったが、何とかやり通した。結局、部活動は、勉学を離れた中で汗と努力と協力を通じて、思い出を作る場、友を作る場、自己を再発見する場であったような気がしてならない。誰が悪いのかは知らないけれど、お互いを悪友と呼びつつしつこい付き合いで今に及んでいる。在学中に始めた正月二日の初蹴会も、後日サッカー部OB会となり、また翠巒体育会設立の切っ掛けとなった事は光栄である。雪の中のあの校庭に雪ダルマを二個作って始めた初蹴りが今日まで続いているのは、真の腐れ縁の悪友のしつこさと、先輩諸兄の協力のお陰だと思っている。それは、広い校庭に同じ汗を流した者のみが共有し得るものであると信じている。

そして、これに続く者たちが絶えない事も信じている。願わくば、もう少し勝負に対して執着を持ってもらいたい。やるからには勝たねばならない。勝負の世界では、勝と負の二者択一なのである。ゲームを離れた時においてこそクーベルタンの参加の意義があるのであって、ゲームの中には参加の意義はない。勝と負の世界しかない。私たちの時は幸いに、主力となった二年三年を通じ、県で一位と二位しかなかった。下位チームに追われねらわれる苦しさを乗り越えるため、目標を全国レベルのチームに置き練習した。福井国体に出場し得たのも、こうした努力と汗の結果にほかならない。国体では、惜しくも優勝候補の広島の山陽高校に敗れた。

チームゲームは、協力がなければ実力が百パーセント発揮出来ない。その実力を維持・発揮するには、厳しい練習が必要である。今私は教職に就いているが、部活動の中で、「練習で泣き、試合で笑え」と指導している。勝負の世界は、あまりにも冷酷である。でも、一見ぼけて見える社会の方がもっと冷酷なのではないか。人間、自己を振り返って見ると、孤独である事に気付き、そういった時に悪友がいるという事は幸せなのかも。

サッカーというのは不思議なもので、レギュラーで出ている時は周りが良く見えず、現役を退いた時に余裕を持ってプレーが出来るようになる人が多い。良いプレーが見られると、なぜあれが本番の時に出て来ないのだろうと思う。今の高々サッカー部員についてもそうである。余裕を持ってゲームでプレー出来るために、練習の時にぎりぎりの状況を作り出すようにしなければならない。その状況を作り出すために、捻挫・打撲といった多少の負傷を顧みない勇猛なプレーを期待したい。また、技術がなければないでそれをカバー出来るだけの走力を用いる事が必要である。走る事も、一つの大きな技術であり武器であると思う。その事は、すべての部についてもいえる事である。

高々の校舎も新しくなりはしたが、何も教室の中だけが勉強ではないと思う。ましてや校庭もあの通り広いのであるから、若い汗を土に吸わせてやってもらいたいものだ。その土から雑草が育つだろう。それを見て、雑草のようにたくましく、未来に向かい生きて欲しいものだ。時流れ、形変ろうとも、いつも変らぬ雑草が生えていて欲しい。

高々サッカー部には、過去幾つかの栄光の花が咲いた時があった。その花を咲かせた人も、つぼみまでしか咲かせなかった人もいる。そうしたOBの人たちは後輩が高々サッカー部に満開の花を咲かす事を願っている。ひたすらに願っている。そして、ひたすらに大地の肥しとなって働いている。頑張れ！栄養満点の肥しの中から、サッカーの花を……！

（六九回・サッカー部）

群馬県庶民信用組合
理事・総務部長
保科　正巳（五〇回）
山田郡大間々町大間々八五七
電話　〇三七七七（三）二三二一一

群馬トヨタ自動車株式会社
専務取締役
横田　英一（五〇回）
高崎市東町八〇
電話　〇三七三（二二三）七二一一

勝俣産婦人科医院
勝俣　真（五二回）
高崎市上豊岡町一八六
電話　〇三七三（二四）〇三八三

割烹旅館　高松荘
代表取締役
山口　英雄（五三回）
高崎市高松町一五
電話　〇三七三（二二一）三三〇八

特別寄稿

運動部の活動と学業成績

高々教務部長
戸塚興嗣

運動部の活動が高校生にとって、現在の学業のためにも、また将来の人生のためにも、いかに重要なものであるかは論を待たないと思います。しかし、本校では、入学時に一年生の三八％入部した運動部員が、三人に一人は一年の内に退部してしまいます。誠に残念なことです。しかも、この退部した生徒の学業成績は決して伸びていません。この中途退部する生徒を止め、もっと沢山の生徒が入部するにはいかにしたらよいか、その方策を探すため在校生についてその実態を調査しましたので、その概要を略記して今後の御参考に供したいと思います。

第一に、三年間運動部に所属した生徒の学業成績について統計結果を見ると、入試に比べ一年の成績は、一〇〇番以内は同数だが一〇〇番以下がやや下がっている。一年に比べ二年の成績は、一〇〇番以内の人数が四人増し、一〇〇番から二〇〇番までの生徒は半減して一四人となっている。見方を変えれば、運動部員の八分の二は成績が向上し、八分の三は下がっている。なお運動部員で、学年順位一番の学年もある。しかし、運動部員の三分の二は、勉強不足であることも事実である。

第二に、勉強時間について見ると、本校としては一日三時間以上の家庭学習をするよう指導しており、成績優秀者になるためには四時間必要なようである。しかし、一年生の家庭学習の平均時間は二・四時間、三年生の一学期が三・二時間となっており、一時間以内が一年生四六名、三年生で二五名もいるのは困ったものである。運動部だけで見ると、一年生一四〇名中四三名は三時間以上勉強しており、これが各運動部に散在し、三時間の家庭学習時間が取れない部はほとんどなく、特殊な部でもシーズンオフを活用すれば年平均では可能と思われる。従って、運動部に入っていても勉強時間を確保することは可能であり、強い精神力によって小さな余暇を活用すれば、勉強には差しつかえないはずである。部員の勉強不足は、部活動が激しいためではなく生徒個人の努力と向学心の不足によると思われる。従って、退部しても学業成績が上がらないのは当然である。

第三に、一年生で中途退部した生徒のその後の状況を見ると、二年では家庭学習の時間の平均が運動部員より〇・一時間多くなり成績もほんのわずか上昇したのに過ぎず、三年一学期には勉強時間は運動部員と同じく平均三時間となり、三年後半には運動部員に時間の余裕の生ずることを考えれば、中途退部した生徒の結果が平均では運動部員よりよろしくないこととなる。なお、中途退部する生徒の一年の成績も勉強時間も、三年間運動部に所属した生徒よりそれらの平均が劣ることを見れば、努力不足による学業不振を部活動をやっているためと思い中途退部する生徒が多いと思われる。

以上のことから、本校においては、運動と勉強は両立出来るといえます。そこで、まず先輩の皆様に御理解いただき、現役の部員は部活動に甘えないで全員がしっかり勉強して実績を上げ、後輩とその保護者が勉強の面で安心して運動部に入れるようにすることが、本校運動部発展のために最も重要なことと思います。

（三九回）

株式会社 田胡忠
代表取締役 田胡吉明（五四回）
高崎市高関町三一一一—一一
電話 〇二七三(二一七)三三三三三

株式会社 吉忠
代表取締役 田胡吉明（五四回）
高崎市北通町六六
電話 〇二七三(二一七)一七二七

有限会社 群馬西毛霊柩車
代表取締役 田胡吉明（五四回）
多野郡吉井町長根字羽毛田二五三
電話 〇二七三八(七)三五六九

冬木工業株式会社
取締役 冬木金雄（五四回）
高崎市栄町二二一—二一
電話 〇二七三(二二二)五〇〇八

第二九回高高・前高定期戦

生徒会報お知らせ鳥臨時号　一九七五・一〇・九　総務発行　より転載

高々敗れる

十月七日、小雨の降る中、高崎高校において「第二九回定期戦」が行われました。高々生は八時に集合。そこへ、前夜慌てて取り付けたアーチの下をくぐって宿敵前橋高校がやって来ました。

九時四五分より競技が始まりましたが実行委員の予想とは裏腹な展開を見せ、何と三〇点という大差をつけられ敗れ去りました。

定期戦を終えて

実行委員長　小島　淳暢

高々四連勝バンザイ！と、次の新聞、またこの会報の上に載せるつもりでいたのですが、前高の力強さに屈した形となってしまいました。終始前高ペースで、期待していた部の番狂わせもあり、また例年通り一般の不振が目立ちました。本当は一般が頑張るもので、部におぶさるのはよくない事なのですが。これらの要因として、練習不足、団結力が欠けていた事、盛り上がり、つまり勝とうという意識に欠けていた事などが挙げられます。しかし、これらの事は、実行委員の姿勢が安易であり、発足が遅れた事も手伝って満足の行く準備が成されていなかった事の裏付にもなる事でしょう。これらの事は、実行委員長として深く詫びなくてはならない点であります。来年は敵地に乗り込む訳ですが、この貴重な教訓を無駄にしてはいけないと思います。来年の高々の奮起を期待すると共に、来年の実行委員長に今年の分まで頑張ってもらいたいと思う次第です。どうも敗けてしまってすみませんでした。

定期戦に思う

「この雨は高々生の涙雨である。」

これは閉会式における前高実行委員長の言葉である。成程、三年生は今年も勝って、負け知らずのまま卒業したかったに違いない。にもかかわらず、三〇点というまれに見る大差で敗れたのだから、その悔しさはひとしおであろう。

この大敗の要因は幾つかあるが、第一に実行委員会の取組の遅れ、総務の非協力的態度などが挙げられる。

しかし、最も大きな要因は、あまりに使い古された言葉ではあるが、高々生の定期戦に対する気構えの低さであろう。実行委員が思うように集まらず、クラス巡りを行ったが反応がまるでない。一クラス二名を選出しても、委員会には出席しない。中には、「登録だけでいいんだろう」などという不届き千万な御仁もいた。練習どころか、当日の試合になって初めてチームの仲間と顔を合せたというのもざらである。応援にしてもそうだ。はるかに前高生の方が多かった。高々生とは見ると、教室でトランプといった状態である。このような中で、一般を一二点差までこぎ着けた委員長小島君を初めとする実行委員は、むしろ誉められるべきではないだろうか。

次に、三連勝に酔い、今年もという安易な気持があった事も敗因の一つである。

これら、高々生に存在する団結力のなさ、無関心とが改めて認識出来たという点では、この大敗は実に有意義であるといえよう。私たちは、ただ単に小島君が坊主になった事で、今年の定期戦を終らせてはならない。また、この屈辱を踏台として勝利を奪い返さねばならない。

さあ、高々生諸君、来年こそは前橋駅の噴水で凱歌を上げようではないか。そして、前高を涙雨の洪水で押し流そう。

開会式の風景（S50・10・7）

×××　×××　×××

定期戦が終った。そして、一つのわだかまりが残ってしまった。当然本校生徒の態度である。「早く帰りたい」、「出席は取るのか」、「もうすぐ模擬だ」等々、全く寂しい言葉である。別にとやかくいうつもりはないが、彼らが自分の高校生活をどう考えているのか疑問に思ってしまう。年々灰色に染まって行く高校生活にむなしささえ忘れてしまった高校生が、あまりに多い。熱気に満ちた高々生の姿は、もう見られないのだろうか。

第29回　対前高定期戦　得点表

		水泳	野球	陸上	卓球	庭球	バレー	バスケット	剣道	柔道	駅伝	サッカー	ラグビー	綱引	体操	小計	総計
高高	部	6	0	0	0	0	0	3	6	0		6	0		6	27	52.5
	一般	6		1.5	1	9	4	4						0		25.5	
前高	部	0	6	6	6	6	6	3	0	6		0	6		0	45	82.5
	一般	3		7.5	8	0	5	5						9		37.5	

先輩、今年も頑張ります

現役の抱負　その1

先輩、今年も頑張ります

陸上部

三年　清水　俊夫

昨年は、物心両面からの御指導・御支援、誠に有難うございました。部員一同お礼申し上げます。

昨年は、部員数の多分県下一であろうという少なさにもかかわらず、インターハイへ三人出場、学校対抗一部六位という成績を収めたことは、大変素晴らしいことだと自負しております。

今年はと申しますと、やはり部員が少ないので新人を沢山入れたい、そして、毎日毎日頑張って練習を続けたいと思います。陸上の場合は個人競技ということであり、他の競技でも同じでしょうが、自分に対する厳しい地道な努力と勝負に対する執ような執念が大事であると考えます。勝たなければどうにもならない。幸い今年は、関東大会が東京、インターハイが隣の長野ですので、一発ねらおうと思っております。永い高々の陸上部の歴史の中で入賞一人（鈴木修・走幅跳）というのはさびしいので、この辺で一丁やってやろうと思います。特に今年は、先輩に新しいグラウンドを作っていただけるので、トレーニングも充実したスケジュールで行えると思いますので……。

最後になりましたが、今年もよろしくお願い致します。

総体を目指して

卓球部

三年　宮宰　真人

現在のところ我が卓球部は、全体的に良い成績を収めている高々運動部においてあまりぱっとしない部であると思う。確かに今までは、県大会で上位に食い込むというような活躍はなかった。この事は、他の運動部と比べて実に恥しい事ではあるが、それなりに練習量の増加などの努力を重ね、また最近この成果が各部員に見られて来た。しかし、自分の決め球を持っていないという最大の欠点が、まだ各部員に残っている。あまりにもオールラウンドに成り過ぎてしまって、自分の絶対の得点源というものを持っていないのだ。新三年生は今年の総体で一応練習から退くので、今からこの得点力を身に付けるという事は大変な事ではあるが、春の合宿なども予定しているので、総体までには一段と上達し県の上位勢との差もかなり縮める事が出来るだろう。また、新二年生も大分力を持っているから、新三年生が抜けた後、積極的練習によって県の上位に食い込む事が出来るであろう。

とにかく、今年の総体では、何としてでも団体でベスト8、個人ではベスト16に少なくとも一人は送り込みたい。これが、今年の総体の目標である。

V2への抱負

水泳部

三年　脇　孝二

今年の第一の抱負は、いうまでもなくV2である。ここ数年惜しい所で涙を呑んでいた水泳部も、昨年ようやく優勝を勝ち取った。しかし、それも一年で他に渡ってしまえば、昨年の優勝はラッキーだったといわれるであろう。そこで今年は、二年連続の優勝を果して、「水泳の高々」と県下にその名をとどろかそうという訳である。また、一・二年生の実力も伸し、水泳部の黄金時代を築き上げたい。決して夢ではない。現在、部の実力は、昨年をはるかに上回り県内随一を誇っている。それを支えているのは、温水プールの使用を始めとする「量より質」のハイレベルな練習である。

とはいっても、少数部員という不安がない訳ではない。そこで、新入部員を多数勧誘し、補強に努めようというのが第二の抱負である。けれどもこの抱負も、V2という最後目標の第一ステップであるから、今年の抱負は、「優勝」の二文字に尽きるようである。

株式会社研屋
常務取締役
清水正爾（五五回）
高崎市飯塚町八〇五
電話（〇七二）六一五〇九五

宝産株式会社
取締役
沼賀勝平（五五回）
高崎市大橋町一〇〇
電話（〇七二）六一五一

バーマジョーレ
生方将夫（五六回）
高崎市柳川町一二
電話（〇七二）一二三七八三〇

桜井接骨院　桜井柔道場
桜井弘（五六回）
高崎市飯塚町一〇四〇
電話（〇七二）六一五〇一

先輩、今年も頑張ります

現役の抱負　その2

今年こそは バスケット部

三年　佐藤　真澄

我々の今年の第一目標は何といってもインターハイに出場する事である。残念な事に、ここ数年来先輩たちは、出場まで後一歩という所までこぎ着けながら無念の涙を流して来ている。今年こそは、母校の名誉のためにも、バスケット部の伝統のためにも、絶対に出場したい。

また、インターハイ出場の準備段階として、第二目標の春の県高校総体優勝がある。去年の総体では決勝で惜しくも敗退してしまったが、今年はもちろん優勝をねらい、更に関東大会へも出場して素晴らしい成績を収めたいと思っている。

今年のチームは、例年になくチームワークもとれている上に、選手も大型で、これまでの大会でも新人戦で準優勝という成績を収め、これからの目標への下準備も出来ている。また、先輩たちの暖かい応援や素晴らしい監督にも恵まれて、満足のいく様な充実した練習もする事が出来るので、努力次第では目標達成も決して不可能ではないと思う。

まだ今後解決すべき沢山の課題が残っているが、部員全員で一致団結しそれらを一つ一つ乗り越えて、少しでも目標に近付いて行きたいと思っている。

今年の抱負 山岳部

三年　大沢　貞夫

今年の山岳部の抱負としては、まず第一に、何といっても「春・夏・冬」と年に三回程行われている合宿内容の改革。その一つとして、食事のことを指摘出来よう。殊に縦走登山である夏合宿においては、時間やカロリーを考慮して、インスタント食品の使用を増加する。そして今年の冬合宿での食糧不足のようなことを再現しないためにも、より一層の非常食の増加。また、合宿の日程や場所の選択については出来るだけ早くから詳しい計画を立てるようにし、合宿中においてはコース・日程等の変更を最少限にするように努力する。また、他校との情報交換による知識や資料を増す。

次に、先にも触れた他校との情報交換の手段として、今まで行われて来た部誌の発行、翠巒祭での展示、以前には行われたことのある他校との合同登山の復活などを予定している。

インハイ団体戦出場を 庭球部

三年　伊藤　俊彦

今年の部員にとって恵まれている事に先輩の残した実績が挙げられる。個人は特に、団体においてもそれはいえるものの、関東・全日本共に団体出場出来なかったのは残念な事である。そして我々の課題は、個人はもちろん、団体で両大会出場をねらう事である。幸いな事に我々は、新人戦で三位、インドア県予選で二位になった。これで一応、関東大会をねらえる立場に立ったといえる。正直な話、さほど恵まれたメンバーともいえないものの、そこはチームワークよろしくと行きたい。以上、今年の抱負の第一は、団体戦での関東・全日本出場である。

第二に、当然個人戦での戦績がある。これは、昨年が素晴らしかったため、少しでも昨年に近付く事である。やはり最終目標は、関東・全日本出場である。

第三に、部としてまとまった活動をして行きたい。今年の三年生と二年生の間には、昨年の三年生と二年生の様に和んだ雰囲気が感じられない。そこで、縦・横共に、仲良く、しかしけじめをつけてやって行きたいと思っている。

他にも細かい点は多々あるものの、強いて挙げるならば、以上が大きな抱負といえる。そして、今年の軟式庭球部としては、過去のどの部をも上回る程の成果を期待はするが、それにも増して、庭球部所属そのものに喜びなり意義なりを見出せる様な部にして行きたいと思う。

広田不動産
広田勇治(五八回)
高崎市田町九二
電話 〇二七三(二二)七五四七

株式会社 大陸不動産
専務取締役
山口正敏(五八回)
高崎市宮元町一〇四
電話 〇二七三(二二)四〇三一

いとう時計店
伊藤秀之(五九回)
高崎市連雀町五五
電話 〇二七三(二二)二八五二

武内葬儀社
専務
竹内成幸(五九回)
高崎市本町三一八九
電話 〇二七三(二二)三六六三

求める心を持ち続けたい
バレー部

三年　塚越　昭一

昨年は、県高校総合体育大会で優勝という三〇数年振りの素晴らしい成績を収める事が出来ました。私たちも、昨年に負けないよう一生懸命やって来ました。国体予選会でベスト4入りをし、新人大会兼春の高校選抜大会県予選会では北関東大会出場の前橋商業高校に惜敗しました。少ない部員にもかかわらず力を合せて大会に臨みましたが、もう一歩の所で敗れてしまいました。今後の大会としては、春季大会（本間杯）があり、すぐに県高校総体でベスト4に入ると関東大会の出場権が得られます。そしてインターハイ予選と予定されています。

これからのポイントとしては、チームの特長を生かして行く事だと思います。まず一人一人の持味を伸ばす事です。エース金子と対角の塚越、長身の吉田が攻撃の軸となり、田中・小島の速攻をうまく織り交ぜ、坂本のセットワークで速いテンポのバレーを展開したいと思います。上級生を中心として、サーブカットを確実にセッターに返し打たれてても拾いまくって行くような、粘りのあるバレーを目指したいと思っています。テンポのあるバレーでかなり面白いチームになりつつあるので、今後の大会が楽しみです。今までの大会で学んだ事を練習で生かし勇気あるプレーが出来るよう、求める心を持ち続けて行きたいと思います。

県総体では是非とも昨年のような素晴らしい成績を収め、昨年ベスト8入りを果した関東大会では昨年に劣らぬよう頑張りたいと考え、良き指導者のもとに、これからも精一杯やりたいと思います。

真のラグビー精神を
ラグビー部

三年　根岸　赴夫

ラグビーをする高校生にとって憧れとなるものは、一年間の練習の成果と技を競い合う全国大会であろう。我が伝統ある高々ラグビー部も結成以来数々の栄光を勝ち得て来たが、今年もその伝統に恥じないよう戦う気構えを持って練習に励みつつある。

部員一人一人のラグビーに対してまた練習に対する考え方は、大分異なっていると思う。精神力と忍耐力を養うために入部した者、話相手・友達が欲しくて入部した者、なかにはただ何となくといった者もあるかも知れない。だが、毎日ラグビーをやりながらその中でお互いに話し合い触れ合いながら真のラグビー精神を見付け出し、そう努力する過程で全員の心が一つになりチームワークがおのずと出来て来る。そんなチームが出来たらと思うし、またそういうチームにして行かなければならないとも思っている。他校と比較して見ると、確かに練習時間は短い。しかし、その点は内容の濃い練習とチームワークでカバーし、より一層素晴らしいチームに仕上げて行きたい。

甲子園へ
野球部

三年　高田　勉

甲子園――全国の高校球児が憧れ、本校でも数多くの先輩が挑戦し成し得なかったこの甲子園へ行くことただ一つが野球部の目標です。これは、誇張でも何でもありません。部員一人一人が、心の中で燃やしているものです。若い力をすべて注いで一つのことに打ち込むに値する程、甲子園出場というものは素晴らしいことなのです。

しかしいかに甲子園出場と気ばかり焦っても、努力なしには実を結びません。そのためには基礎体力作り、実技上達、その他色々あると思いますが、本校に最も大切なのはチームの和だと思います。部員一二名という非常に少ない数では、他のチームに比べ総力ではかなり劣るものがあると思います。しかし、それを五分五分、あるいは逆に打ち破るには、何といっても個人個人の気迫とその和にほかありません。

一昨年秋の県大会で、本校が一八年振りに優勝した時の部員数は一一名。しかし和はもちろんのこと、個人の気合は相手チームの二～三倍程もあったように思われます。そのような気迫のもとに成り立っている和、つまり良い意味での厳しさを持った個人個人の和を大切にし、春の大会、そして夏の全国大会県予選へ臨み、二度と帰って来ない青春時代に若い血を完全燃焼させるよう全力で頑張りたいと思います。

有限会社　塚越家具店
塚越勝男（五九回）
高崎市大橋町一〇四
電話　〇三七三（二二）四一七一

御園すし
本間良和（六一回）
高崎市柳川町八三
電話　〇三七三（二二）四九〇六

酒井酒造店
専務取締役
酒井征哉（六二回）
高崎市九蔵町八三
電話　〇三七三（二二）二四二七

このえパン
専務取締役
石附一利（六五回）
高崎市本町二一一一七
電話　〇三七三（二二）四五一四

先輩、今年も頑張ります

現役の抱負　その3

柔道と相撲に
柔道部

三年　高橋　浩

柔道において、今最大の目標としているものは、関東大会出場である。昨年の新人戦ではベスト8に食い込んだので、何とかして代表六校に選出されたい。またそれは、今度達成すれば一〇回目だそうなので、なおのこと頑張りたい。

相撲では、三月下旬に高知で開催される全国大会への出場権を既に昨年の新人戦で得ているので、群馬県代表として堂々と試合をして来たい。群馬の相撲のレベルは、他県に比べてまだまだ低いが、これからは相撲にも重点を置いて練習して行きたい。

それから、関東大会は毎年出場しているが、上位に食い込むことが出来ないので、今年は差し当り決勝トーナメント進出に目標を置いている。例年インターハイ予選には三年生は出場しないが、今年は出場してインターハイ出場をねらいたいと思っている。

また、新二年生に有望な選手がいるので、彼らを鍛え、次の時代への足固めをするつもりでいる。

常にひたむきな心で
剣道部

三年　内川　文雄

現在のチームの平均身長は一六五cmと小粒ぞろいで、特に目立った選手もいないが、諸先輩に負けじとどうにか頑張っている。昨年の選手権は三位、新人戦では二位と成績は比較的良かった。これも先生方の熱心な御指導と全部員の努力の賜物ではないかと思う。しかし、一度や二度良かったからといって次の試合に必ず勝てるといい切れないのが勝負の世界のつらい所で、皆、「むしろこれからが大変なんだ」という気持で練習に励んでいる。

最初にいったように、現在のチームは小粒ぞろいである。そこで今、逆にそこを生かすために、小手を中心にした練習を行っている。まずこれをマスターするのが、当面の目標である。

春合宿の後、関東・総体・インターハイと各大会を迎える訳だが、勝利におぼれることなく、常にひたむきな心で練習を積み、勉強と部活動とを両立させた上で、今まで以上に良い成績を残したいと思う。

総体を目標に
サッカー部

三年　山越　正弘

今年の目標と言えば、何といってもインターハイといいたいのですが、そこは県下でも指折りの進学校？高々の事ですので、六月の予選まで残ってやる三年生は恐らく数名だと思います。いくら頑張って見た所で、三年生が抜けてしまった後のチームで勝ち進む事は不可能です。ですから我々が勝つ望みのある大会は、五月の県総体だけの様です。

ところで、現在のサッカー部の状況ははなはだ芳しくなく、公式戦においては一月の県選手権は一回戦コインによるトスで敗れ、二月の新人戦では一回戦不戦勝、二回戦敗退という様に悪く、練習試合にしても新チーム結成後勝ったものは一試合だけという有様です。しかし、勝った試合が一試合ですが、負けた試合も新人戦の一試合だけです。残りはすべて引分。我がチームは負けないのですが、勝てない様です。折角リードしていてもちょっとしたミスから失点して引分にされたり、逆にリードされていて土壇場で同点としたり。要するに、我がチームは相手チームの実力と同じ力しか出せないのです。相手が弱ければ我々も下手くそになるし、強ければ実力以上のものを出す事もあります。こんな状態ではとても新学期早々にある県総体さえ乗り切れないでしょう。

それではこれからどうするかといえばミスを絶対にしないディフェンスと、どんな場面でも点の取れるオフェンスを作る事です。これはかなり以前からいわれている事ですが、なかなか克服出来ない様です。しかし、頑張って、県総体で優勝し優勝旗を高々に持って来ます。

先輩、見に来て下さい
体操部

三年　依田　光広

相変らずバスケット・バレー両部にはさまれて頑張っています。今年は、三年生が四人いるので何とか団体で上位に入賞しようと思っていますが、何といっても練習量は争えないものです。しかし現在、練習内容は充実し、時間の方もまあ満足出来るようになっています。

本年度より、長年御指導を仰いだ森田忠義先生が県教委事務局へ行かれ、代りに富岡高校より来られた滝沢武司先生が顧問になられました。そんな訳で今が一番苦しい時なのですが、皆積極的に活動しています。出来れば、OBの皆さんにもたまには練習を見に来て欲しいと思っています。残念ながら我が体操部は、現役とOBの皆さんとのつながりがあまりにもなさすぎるのではないでしょうか？これからの体操部の進歩のためにも、是非一年に一度位は遊びに来て下さい。護国神社の桜も皆さんを待っています。

県総体が近付きましたが、ひたすら栄光を目指して練習しています。今年も高崎工業高校が抜群の強さを誇っていますが、その高工に勝るとも劣らない様な高々体操部にして行こうと思っています。

運動部の中心的存在として
応援部

三年　田所　武司

今年もまた色々な大会が予定されているであろう。その大会に備えて我々は練習している。

今年はまずバスケットの応援から始まった。私が応援部に入ってから野球以外の試合の応援をしたのは初めてであるが、応援部は決して野球部の付属的なものではない。応援部は、運動部の中で孤立してはいけない。すべての運動部の中心的存在として、あらゆる試合の応援をこなして行くべきであると我々は考える。

試合の応援も重要であるが、もう一つ重要なことは、リーダー公開祭を成功させることである。そのためには、翠巒祭を実現させなければならない。最近、高崎市内の高校応援部の間で連盟会を作り協力してリーダー公開祭をやろうという計画もあるようだが、まだ実現しそうではないので、是非とも翠巒祭を実現させたいものである。

春に合宿をやる予定である。この合宿で、先輩から受け継いだことをより完璧にし次の代へ伝えて行き、また部員相互の連帯を深めることが目的である。

応援部は、部員数が少ないが、少ないながらも他校の応援部に負けない位頑張っている。応援部も頑張っているのだから、他の運動部ももっともっと頑張ってもらいたい。

第三〇回三重国体に出場して
サッカー部

三年　七五三木　敏幸

七月五日翠巒祭最終日、私は先生に国体代表候補に選ばれた事を知らされました。その前月、インターハイ県予選であまり良い調子とも思えなかったので、どうして選ばれたのか自分でも不思議でした。翌日第一回の練習会に行くと、ほとんどの高校がテスト中だそうで選手の集りが悪く、練習も大した事はなかったのでほっとしました。その後夏休の間中、月～土曜は学校での練習、日曜は国体チームの練習で、体力が持つか心配だったけれど何とか乗り切りました。チームは九月の関東地区予選に向けて練習を続け、静岡などの強豪チームとも対戦して強化を図っていました。

九月の関東地区予選は、茨城県古河市で行われました。この予選は負け残り戦で、つまり関東は八チームある所へ国体出場権は七チーム分しかなく一チームだけ出場出来ないという事で、前年までは群馬が常にその一チームだったので本年はどうしても出場しようという意気込みがすごく、一・二回戦は栃木・山梨に惜敗してしまったのですが、最終戦神奈川を3―2で破り出場権を獲得しました。

本大会の一回戦は青森という全国的に見てレベルの低い相手との試合だったのだけれど、前半一点先取され、すぐ同点に追い付き、一〇分後に逆転したのですが、終了直前に同点に追い付かれてしまい、延長となり疲れの見える群馬は足がつる選手が出たりしてついに一点入れられてしまいました。負けたとはいえ、この貴重な体験を生かして、今年こそは全国のレベルに追い付きたいと思います。

昭和五十一年度
新主将紹介

バスケット部　（佐藤　真澄）
卓球部　（高室　真人）
バレー部　（塚越　昭一）
柔道部　（高橋　浩）
水泳部　（脇　孝二）
サッカー部　（山越　正弘）
ラグビー部　（根岸　赴夫）
庭球部　（伊藤　俊彦）
剣道部　（上　雄）
陸上部　（清水　俊夫）
体操部　（内川　文）
山岳部　（依田　光広）
応援部　（大沢　貞夫）
野球部　（田所　武司）
（高田　勉）

昭和五十年度

高々運動部　新人戦の成績

◇陸　上
（十月二十五日　県営競技場）
槍投　清水（一年）50M62　二位
一〇〇M　波多野（一年）11秒6　四位
一一〇Mハードル
渡丸（一年）16秒2　一位
走幅跳　渡丸（一年）6M30　四位

◇卓　球
（一月三十一日　高崎市体育館）
四回戦　狩野（一年）・金井（一年）
三回戦　高室（一年）・山口（一年）
二回戦　下村（一年）・田村（一年）
一回戦　柴田（一年）

◇軟式庭球
○新人学校対抗
（九月十五日　県営コート）
準決勝　高々1—2板倉高
○新人大会—個人
（九月二十七日・二十八日　県営コート）
大野・久米組　ベスト8
三回戦　二組
二回戦　四組
一回戦　二組
○全日本団体選抜県予選
（十一月二十四日　高市女コート）
決勝　高々0—2沼田高　二位

◇バスケット
○決勝リーグ（一月十七日・十八日　桐生）
高々51—58桐生工
高々84—77前橋高
高々92—54太田高　二位
○全国選抜選手権関東予選
（二月十四日　高崎市体育館）
一回戦　高々46—72土浦日大高

◇バレー
（一月十五日・二十五日　前橋）
準々決勝　高々0（10—15、13—15）2前橋商

◇ラグビー
○八人制大会　決勝トーナメント（高々）
準々決勝　高々60（20—0、40—0）0前橋高
準決勝　高々12（0—16、12—4）20農大二高
○八人制新人大会（二月八日　高々）
準々決勝　高々20（10—4、10—0）4中央高
準決勝　高々0（0—8、0—8）16前橋高

◇サッカー
二回戦　高々1—3渋川工

◇柔　道
〈柔　道〉（十一月二十三日　県武道館）
準々決勝　高々0—1渋川工
〈相　撲〉（十一月十五日　桐生）
○団体戦　三勝一敗（15得点）一位
○個人戦
一年の部　横堀　一位
黒崎　二位
福田　三位
二年の部　高橋　二位
大井　三位
村上　三位

◇剣　道
（一月二十五日　前商）
準決勝　高々3—1高崎工
決　勝　高々1—4利根農　二位

◇野　球
一回戦（九月六日）　高々9—2蚕糸高
二回戦（九月二十七日）高々0—5富岡高

今後の御健闘を
—二顧問御栄転—

この春の教職員定期異動により、庭球部顧問鴻巣敏之先生が新設の県立前橋南高校へ、体操部顧問の森田忠義先生が県教委体育課へ、それぞれ御栄転になりました。両先生の今後ますますの御健闘をお祈り致します。

なお、森田先生は、体操部OBとして今後も本会の発展のために御協力下さるとの堅い約束をいただいております。

（事務局）

編集後記

早い早いといわれた桜の花もどうやら例年通りに終りを告げ、まずまずというところです。高々も新入生を迎え、各運動部にも若さ!!が注入され、護国神社の翠にはつらつさが映えています。

「翠巒体育」第二号も、特別寄稿の母校の先生や先輩の皆様、並びに会員・現役の皆様の御協力により発行の運びとなり、厚く御礼申し上げます。

今回は多数の原稿が集まり、編集担当者一同、うれしい悲鳴をあげています。また、諸般の事情で広告を掲載させていただく事になり、関係の皆様に気持好く御協力を賜り感謝しております。なお、トヨタカローラ高崎の小山禧一先輩には、スペースの都合で一部次号に回していただく事になり、心からお詫び申し上げます。

正月からずっとこの仕事に携わっている一人として、同窓会副会長原一雄さんの「長く続けて下さい」の一言が心に残ります。翠と共に夏が来ます。会員諸兄の発展と高々運動部の健闘を祈ります。

（佐藤）

翠巒体育　第二号
昭和五十一年四月二十八日発行
翠巒体育会事務局
高崎市八千代町二—四—一（〒三七〇）
群馬県立高崎高等学校内
電話　〇二七三（二四）〇〇七四
印刷　有限会社荒瀬印刷